

ウェールズ, コンウェー水産研究所訪問滞在記

細 見 彬 文

ヒューズおばさんの宿

タクシーの窓から見るマンチェスターの街はロンドンよりも近代化されていた。街が近代化されると日本の街と似てくるので面白味がなくなる。しかし、マンチェスター駅は昔の凝った建物だった。しかし駅舎は建物全体が真っ黒にぬりつぶされていた。第二次大戦中にドイツの空襲をさけるためにそうしたのだと後で聞いた。私は中学校の社会科で習ったことを思いだしていた。世界で最初の鉄道が通じたのがリバプール・マンチェスター間であったと。私は駅員をつかまえて、これが世界で最も古い駅なのかと聞いてみた。駅員はうなづいて、そうだと答え、しかし建物はもち論建てかえているけどねと言っていた。私は目的地のコンウェー行きの切符を買い三両編成のディーゼルカーに乗り込んだ。

目的地のコンウェーには世界でも珍しいムラサキイガイの生態、生産研究を中心に仕事をしている国立水産研究所がある。ムラサキイガイの生態学を研究している私としてはぜひとも一度は訪ねなければならない所である。ここの所員の人達の書いた論文や著書は多く、世界的に名の通った人達もいる。以前から一度、訪ねたいと思っていた所へやっとなることができたわけである。

列車はアイルランド海峡を右に見ながら、雲のたれこめた陰うつな風景の中を走った。列車が各駅停車だったものだから、3時間もかかって、ランダッドノー駅に着いた。車掌が来て、ここが終点だから降りろと言う。もう夜の10時をまわっていた。コンウェー方面に行く列車はないのかと聞くと、それは次の駅だからタクシーで行けと言う。仕方なく駅を出ると、夏の7月末だというのにひどい寒さが襲ってきた。ぶるぶるとふるえながらタクシーを待った。私を乗せてくれたのは白タクだった。このあたりのタクシーは白タクしかないようだった。運転手はひどいなまりのある英語を使うので、なにを言っておるのかほとんどわからなかった。白タクは私をヒューズおばさんの家というのに連れて行ってくれた。

こうした家はイギリスのどの地方に行ってもあるB&Bと称する民宿である。B&Bというのは、ベッド・アンド・ブレックファーストの略である。私が寒さにふるえながらドアをノックすると、50才がらみの人の良さそうな婦人が出て来て、「まあ、遠い所からよく来てくれたね、さ、どうぞどうぞ」と言って私を応接間の暖炉の前にすわらせ、「お腹が空いたでしょう、熱いスープを

作ってあげるからね」と言いながら、台所に行ってももの10分もしないうちに食事の仕度をととのえてくれた。私は暖いスープと羊の肉、ジャガイモのいためた食事で体をいやした。この民宿は水産研究所のはからいで紹介してもらったものであった。宿は三階建てで十部屋ほどの部屋があり、私は八畳ほどの部屋に案内された。

研究所の人達

研究所からジープで若い男が私を迎えに来てくれた。エドワード氏と言う私と同年代の研究員だった。私は2週間も世話にならねばならないので、日本製の計算機をプレゼントにさし出したが、彼は、我々にはそうした習慣はないとてがんとして受け取らなかった。コンウェーの町の中心に大きな古城がある。城壁にそった坂を5分も登ると、古い建物があって、それが研究所であった。私は以前から会うことを願っていたファー博士にまず紹介された。彼は私より10才ばかり年長だった。彼はムラサキイガイについて、定着から生産までの幅広い一連の仕事をしている人物である。ムラサキイガイの生態学の第一人者である。私は彼に会えたことを喜んだ。彼は私のプレゼントの電子計算機を心良く受取ってくれた。この計算機は大変な威力を発揮した。計算機にlogやルート、 a^x といった機能が附いていることもあるが、英国で電子計算機というのは日本ほど一般的でない。日本ではだれでも持っている程度の計算機が英国農水食糧省の研究所に一台もないのだから不思議であった。英国ではロンドンの中心街の電気器具店に日本製のものが、日本の値段の3倍程度で売られているのが実情である。ファー氏は日本製の計算機がすばらしいものだから、ひどく喜び、自分の片腕になるといってくれる程だった。滞在中の2週間は誠にファー氏のひとかたならぬ世話になることになってしまった。

ファー氏は研究所の副所長ウォールン博士を紹介してくれた。研究所に来たのだから、一応礼儀として挨拶をしておいてほしいということだった。ウォールン博士とは薄暗い実験室の粗末な部屋で会った。博士はカキの研究でもよく知られた人だし、著書もたくさんある。日本でも氏の論文は多く読んでいたので、会えたことは幸いだった。赤ら顔の古武士のような顔つきをした人物で、私にこれはただ者ではないという印象を与えた。年は60才をすこしすぎているようだった。彼は、私が外国人で

あることを思えばかって、高校の英語の先生が生徒に質問するように、非常にゆっくりした英語で、この研究所ではなにがしたいのか、何日滞在したいのかというような事務的なことを聞いてから、水産学の哲学的見解を少しのべ、日本の現状などを質問してきた。私は、日本の食糧自給率が35%であることや、水産は世界の200海里経済水域の設定でさらに漁業がやりにくくなっていること、特にソビエトとの間ではよく漁船拿捕の問題がおきることなどをのべた。氏は最後までゆっくりした英語で話したので、私が、英語の能力が不十分ですみませんとつい言うてしまうと、いや、私が日本語が話せなくてすまないのだと逆に答えるほどの紳士であった。

イガイのベッド

デー氏は私を研究所から近いムラサキイガイのベッドに連れて行ってくれた。コンウェー川の河口に位置するそのベッドは、幅500メートル、長さ1キロもあるほど広大なものだった。大地が完全にムラサキイガイで埋っていた。どこを見ても貝しか居ないという不思議な風景だった。そのムラサキイガイが層をなし、貝の層が30センチにも及んでいる。貝層の下には泥の層が50センチあり、その下に小石の層があるという構造になっていた。泥の層はマッセル・ベッドと呼ばれており、貝が排出した、糞、偽糞が重り溜ったものであった。貝の平均的なサイズは5センチばかりで、これほど大量の貝を養う餌は主としてコンウェー川から流れてくるデトライトスでないかと想像された。デー氏の話では3年か4年に1度、大波がやって来ることがあって、そのときムラサキイガイのベッドは泥の層と共に根こそぎ海にさらわれてしまうことがある。そうなる最下層の小石の層が露出して、春になるとこの小石に幼貝が定着する。貝は生長と共に糞を落すものだから、その糞が積み上げられ貝の層は糞泥の層にもち上げられてゆく。最後には、貝層と泥層を合せて80センチばかりになる。それをまた波がさらってゆくということをくりかえすとの話であった。

神戸で研究しているムラサキイガイのベッドはわずかにコンクリート壁に付いているものである。それでも1平米当りの現存量が40キログラム、生産量が1年で110キログラムという途方もない値を得ている。しかしこのウェールズのベッドは、現存量は日本とそう変わらないが、生産量は神戸の1/3程度の40キログラム程度である。この生産力の差は水温の差が主な原因と考えられる。英国では海水温が低いために、生長が神戸のものに比べておそいのである。しかし、英国のイガイベッドの広大さは、生産量のトータルをもって神戸のものに比べると、神戸のものなどお話にならぬほどちっぽけなものにすぎない。コンウェーからすこし北に行くと、イングランド領のモ

ーコンペーという場所がある。ここには数カ所、広大なイガイベッドがあり、あるものは長さ5キロ、幅3キロといったものまである。土地の漁師はそこを南アメリカと名付けているほどである。しかしこのような広大なベッドも時として押し寄せてくるヒトデの大群には無防備で、次々と食い荒されて、さしもの広大なイガイベッドが消滅することもあるという話であった。私はベッドから貝の標本を数十個採り、日本へ持ち帰ることにした。

イギリスの食事

ヒューズさんの宿では昼食が出ない。だから昼食は外でとらないと仕方がなかった。小さな町のことからレストランは二軒あるのみである。それに喫茶店が三軒ばかり。昼食には困った。メニューには色々書いてあるのだが、名が違っても料理はどれも似たり寄ったりで、羊のステーキに焼きトマト、グリーンピースにジャガイモといった盛りつけで、名が変わるとグリーンピースの代りにマッシュルームがつく位である。だからいつも同じものを食わされているという感じであった。その上、味つけがひどく下手くそで、塩をかけてもコショウをかけても美味にならなかった。イギリス料理というのは、なぜこうもまずいものばかりなのか理解に苦しんだ。イギリス人はこんなまずいものを毎日食っていて平気な人種なのである。彼等は牛肉を食わずに羊の肉ばかり食っているのも妙であった。

デー氏とはよく喫茶店に出かけたが、大変甘いものが多かった。なんでも日本のものよりは2倍甘い味つけになっていた。デー氏はイギリス人は甘いものが好きだからよく太るのだと言っていた。しかし、感心なことには、食堂や喫茶店が満員でも、イギリス人は実に行儀良く静かで、教育がよくゆきとどいていると思った。(これがフランスやイタリアになるとこの逆になる。)

コンウェーに一軒、日本ならさしずめかき氷屋のような喫茶店がある。粗末な机で私がコーヒーを飲んでいると、2人の子供が店先で、いかにも飲みたそうな顔をしてソーダ水を作っているのを長い間ながめている。私は表に出て子供達にお金を持っていないのかと聞くと持たないと答える。なにがほしいのか聞くと緑色のソーダ水だと言うので、子供を私の机に座らせてお金を渡してやった。二人はソーダ水をうれしそうに飲んだ後、礼儀正しくおつりを私に返してきた。おつりを返してよこすのがなんと英国的でうれしかった。

文献の複写

コンウェーの研究所での大仕事は文献複写であった。有難いことに、ここには世界中のムラサキイガイに関する文献が集っていた。あるところにはあるものである。

私の持っている文献と重なるものもたくさんあったが、バイオロジカル・アブストラクトに出ないような地方誌に載った文献、電力会社など民間会社の研究所から出た文献、普通は表に出ないはずのイギリス海軍から出た論文、まだ正式に論文として発表されていない研究所内部の資料といったものがずい分あった。私は宝の山にふみこんだようなものだった。ところが、日本だったら小学校にでも置かれている複写機が研究所にないので驚いた。仕方がないので、カメラで複写することにした。幸い日本からフィルムは多く持って来ていたので、どんどん写しとった。複写だけに3日間をついやした。イギリス海軍から出ている文献などを写すときは、自分がスパイにでもなったような気分だった。

アングレシー島

デー氏は日曜日に私をアングレシー島に案内してやるといって車に乗せてくれた。奥さんも一緒だった。それにロスコーと言う名の犬も加わった。アングレシー島というのは、北ウェールズの狭い海をへだてた向い側にあるさしわたし40キロほどの四角な形をした島である。この島はメンナイストレイトという幅がたった200メートルの川のように見える海によってへだてられている。この川のような海は潮の干満によって、はげしい潮流を生ずる。だから生物群集も急流域に住む特徴あるものが多い。それでここに生息する動物の生態だけを扱って「急流域の動物生態の研究」として10篇ばかりの論文が出ていることは、海洋生態学者なら周知のことである。メンナイストレイトには鉄道橋と自動車橋の2本の橋がかかっている。鉄道はこの島のアムルークという街まで通じており、ロンドンからの急行もある。島は平坦な地形で、ほとんどの場所が羊の放牧場である。牧場は一つが2ヘクタールほどで、それぞれが背丈ほどの高さの土手で囲ってあり、土手の上にはブッシュが茂っているというのが、このあたりの一般的な風景だった。土手と土手の間をぬって、土の道が続いていた。もしかするとこの土手は、その昔、地主が土地を囲って小作農を追いだしたという、例の囲いこみ運動の遺物ではないかと思ったりもした。土手の上のブッシュは今では小鳥や昆虫、植物のファウナやフロラを保護するため、必要欠くべからざるものとなっている。牧場の囲いも昔と今では全く違った意義を持つようになっている。

アングレシー島をドライブすると、石造りの小さな古い家々がよく眼についた。日本の家はウサギ小屋だという批評があるが、そのウサギ小屋よりまだ小さな家々を見かけた。デー氏によれば、この風景は南アイルランド的だということだった。イギリスにも大英帝国の栄光からとり残された部分というのがあると感じた。かつて

英国は世界に君臨し、富を集め、今日のイギリスをきづいた。その長い歴史の中で一度も日の当らなかった場所というのがやはり存在したのである。日本でも高度経済成長期というのがあったが、やはり日の当らなかった部分というのは、そこここにある。それと同じである。アングレシー島のドライブでは色々と考えさせられた。

ウェールズ語

コンウェーの町の標識や看板は2カ国語で書かれていた。レストランのビルも、広告もすべてである。上に書いてある方の言葉は、なんのことかさっぱりわからない。下は英語で書いてある。デー氏に聞くと、上の方はウェールズ語だと説明してくれた。ウェールズ語は英語とは似ても似つかないほど違った言葉で、やたらしとかWの子音が2つ重なる単語が多く、ひどく発音しにくそうな言葉である。デー氏によると、ここウェールズはイングランドやスコットランドとは民族が異り、ウェールズ人はアングロサクソンによる被征服民族で古い民族なのだと言うことだった。ここでは第一言語がウェールズ語で、第二言語が英語だということだった。小学校ではウェールズ語で授業が行われ、ウェールズ語の放送局もある。だから当然のことながら、ここでは英語のよく話せない人達もいるのである。英国人で英語が下手な人がいるということには驚いた。しかしこれは、むしろ立派なことである。征服者のアングロサクソンが被征服者のウェールズ民族の文化を認めていると言わねばならない。ひるがえって我々大和民族はアイヌの文化を抹殺した。アイヌ語の放送局もアイヌ語で教える小学校も日本にはない。しかしウェールズなまりの英語にはかなり悩まされた。私はコンウェーで仕事を終え、プリモウスの臨海実験所におじゃまをして、ロンドン経由で帰国した。コンウェーは美しい街だった。親切な街だった。機会があれば、もう一度行きたいものだと思っている。

(旅行年月 1981—7)